イスラーム世界研究　第 9 巻（2016 年 3 月）192–196 頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 9 (March 2016), pp. 192–196

アキール・コレクションにおけるマウドゥーディー追悼資料［A809］*

須永　恵美子**

Eulogies and Anniversary Articles on Maulana Maududi in the Aqeel Collection

SUNAGA Emiko

The Aqeel Collection is a rich resource on Maulana Maududi and his related books. Saiyid Abu al-A‘la Maududi (1903–1979) was one of the great scholars of South Asia, and was a founder of the political party Jamaat-e Islami in British India. Maududi is known to be a prolific writer, having published 177 books and more than 900 articles in the Urdu language.

Professor Dr. Aqeel has had much interest in Maududi and Jamaat-e Islami since he was young. In addition to books and journals on them, the professor has collected a lot of newspaper articles. Among these newspapers, there is bundle of articles on Maududi’s death and eulogies. Maududi suffered from his illness from the late 1960’s, and he passed away on September 22nd, 1979 at a hospital in Buffalo, USA. Immediately after his passing, many newspapers, TV, and radio reports broke the tragic news inside and outside Pakistan. Professor Aqeel collected these articles not only in 1979, but also on the anniversaries of Maududi’s death. These documents are quite rare in Japan and it should be well analyzed for future research on Mauaudi and his impact on South Asian Muslim society.

20 世紀を代表する南アジアのイスラーム思想家・著述家として、サイイド・アブルアアラー・マウドゥーディー（Saiyid Abū al-A‘lā Maudūdī, 1903–1979）があげられる。彼は、18 世紀から続く南アジア・イスラーム思想の集大成としての位置づけにあり、現代まで多大な影響力を持つ人物である。マウドゥーディーは南インドに生まれ育ちながらウルドゥー語を母語とし、10 代から雑誌編集や執筆を生業としてきた。38 歳で南アジア初の宗教政党ジャマーアテ・イスラーミー（イスラーム党）を設立してからは、同団体を思想的・政治的に牽引してきた。現代のジャマーアテ・イスラーミーは、国政だけでなく、災害時の緊急支援や教育、医療、労働団体の組織など、社会活動団体としても活躍しており、世界各地に支部・関連団体を持つ。同党はパキスタン最大のイスラーム団体であり、1970 年代以降のイスラーム復興では、政権運営においても、草の根レベルでも中心的な役割を果たしてきた。

マウドゥーディーは、アキール博士が強い関心を持って著作の収集・研究をしておられた対象の 1 人である。アキール文庫においては、イスラーム復興やウラマーのセクションとは別に、（AQEEL||A||1401）、（AQEEL||A||1402）がマウドゥーディーの書架として割り振られている。これらの書籍については、［篠置 2014］において、日本国内に未所蔵であった著作やその傾向が指摘されている。

これらの文献に加え、マウドゥーディーに関連する新聞が（AQEEL||A||809）に収められている。その他の傾向として、マウドゥーディーやジャマーアテ・イスラーミーに関連する記事も多く保存

*　本稿は、科学研究費プロジェクト「南アジア諸語イスラーム文献の出版・伝播に関する総合的研究」（課題番号 24320017）の研究成果の一部である。
**　日本学術振興会特別研究員（PD）

されている。例えば、（AQEEL||A||809||Z-54）はマウドゥーディーが死没する3ヶ月前、1979年6月15日に出されたウルドゥー語日刊紙ジャサーラトの一面で、ムハンマド・アフマド・ワスティーの署名記事である。ジャマーアテ・イスラーミーの貢献について、パキスタン・ウラマー党事務局長補（後の党首）シャー・ファリードゥルハックが語るという内容である。（AQEEL||A||809||Z-55）は同じくジャサーラト紙の前外務大臣シャリーフッディーン・ピールザーダの署名記事である。（おそらく2頁の）右上を切り抜いた紙片のため、刊行年月日は不明である。マウドゥーディーがパキスタンの建国運動に反対していたという言説への反証記事である。一般的に、マウドゥーディーは建国に反対していたとされているが、本記事では彼こそが建国の第一人者であり、ムスリム連盟に協力をしていたとされている。

このセクション（AQEEL||A||809）には、マウドゥーディー関連の記事の他にも、独立運動（ジャング紙 AQEEL||A||809||Z-16 他、ナワーエ・ワクト紙 AQEEL||A||809||Z-88-Nov. 24 他）や建国の父ムハンマド・アリー・ジンナー生誕日（ジャング紙 AQEEL||A||809||Z-58 他、ナワーエ・ワクト紙 AQEEL||A||809||Z-63、ジャサーラト紙 AQEEL||A||809||Z-56 他）、同じく建国の父生誕100周年特集（アムルーズ紙 AQEEL||A||809||Z-70、ジャング紙 AQEEL||A||809||Z-71、ナワーエ・ワクト紙 AQEEL||A||809||Z-72、英字ドーン紙 AQEEL||A||809||Z-69、英字パキスタン・タイムズ紙 AQEEL||A||809||Z-68 他）、建国の父没後30周年特集（ナワーエ・ワクト紙 AQEEL||A||809||Z-74、ジャサーラト紙 AQEEL||A||809||Z-73 他）、建国の父特集（英字ドーン紙 AQEEL||A||809||Z-96 他）、3月23日パキスタンの日（ジャング紙 AQEEL||A||809||Z-93 他、ジャサーラト紙 AQEEL||A||809||Z-91 他）、8月14日独立記念日（ジャング紙 AQEEL||A||809||Z-81 他、英字ドーン紙 AQEEL||A||809||Z-89-SP、ジャサーラト紙 AQEEL||A||809||Z-78 他）などに関する記事がまとめられている。アキール博士は1978年から2011年まで、関連紙面を折り畳み、それぞれテーマごとに束にされている。これらの保管状況からは、アキール博士がムハンマド・アリー・ジンナーやパキスタン独立への興味関心を常に抱きながら日々新聞を読んでいた数十年間が浮かび上がってくる。

本稿では、このセクション（AQEEL||A||809）に収められたウルドゥー語新聞のうち、マウドゥーディーの逝去直後に発行された記事を紹介する。

マウドゥーディーは、1903年9月25日に南インドのアウランガーバードのチシュティー教団の家系に生まれた。父サイイド・アフマド・ハサンは弁護士で、母ルクディーナ・ベーガムはデリーのムガル宮廷に出入りしていた詩人クルバーン・アリー・ベーグ・サーリクの孫娘であった［山根 2001: 168］。家庭内ではウルドゥー語が使われ、マウドゥーディーは父から教育を受けて育った。

一家は父の死後ボーパールに移住し、マウドゥーディーはさらに仕事を求めてジャバルプール、ハイダラーバード、デリー、ラーホール、パターンコートなどを転住した。パキスタン建国後はラーホールのジャマーアテ・イスラーミー党本部に居住し、その後の活躍は広く知られるとおりである。

マウドゥーディーの体調は1960年代後半より悪化していった。1972年、マウドゥーディーはジャマーアテ・イスラーミーの党員を集め、体調不良を理由に、アミールの職を辞して『クルアーンの理解』の執筆に専念する旨を伝えた［Badri 2003: 499］。党員らは、彼の病状を鑑みてこの要求を受け入れざるを得なかったとされる[1)]。

1）マウドゥーディーの後任として、1972年10月29日の選挙によって、ミヤーン・トゥファーイル・ムハンマドが任命された［Saulat 1979: 88］。

1979年5月26日、マウドゥーディーは、療養のためアメリカへ旅立った［Hasan 1986: 480］[2]。彼の息子[3]で医師アフマド・ファールーク・マウドゥーディーがバッファローで開業しており、以前より治療のためにアメリカ渡航することを説得していた［Hasan 1986: 480; Saulat 1979: 158］。マウドゥーディーはイスラマーバードから、朝10時15分発のパキスタン航空に乗り、ロンドンを経由してアメリカに到着した。バッファローでは歩くことも困難な状態にあったが、著作『預言者の人生』の執筆を再開し、1979年8月まで執筆活動や訪問客との面会を続けていた［Saulat 1979: 159］[4]。1979年8月、腸の症状が進行し、8月20日に息子の働く病院に入院した［Hasan 1986: 481］。9月4日に手術をおこない、手術は成功したかに見えたが、9月6日に再び病状が悪化し、別の病院に転院した。

幾度かの手術と、3度の心臓発作にたえたものの、マウドゥーディーは1979年9月22日の米国時間朝8時45分に永眠した［Hasan 1986: 482］。

マウドゥーディーの遺体は妻と息子に付き添われ、チャーター便でバッファローからニューヨークに送られた［Saulat 1979: 162］。そのあと、ロンドンとカラーチーを経由し、ラーホールに届けられるまで、各空港でマウドゥーディーを偲ぶ人々が集まり、礼拝が捧げられた［Saulat 1979: 163–166］。葬儀は9月26日の朝、ラーホールの競技場カッダーフィー・スタジアムで行われ、ユースフ・アブドゥッラー・カルダヴィー氏がイマームを務めた［Hasan 1986: 484］。ズィヤーウルハック大統領をはじめ、ラーホール史上最大の30万人と見積もられる民衆が参列し、彼の遺体は同日14時20分、ラーホールのジャマーアテ・イスラーミーの党本部に埋葬された［Hasan 1986: 484］。

彼の訃報は、パキスタン国内外のテレビやラジオで速報され、ズィヤー大統領も即座にラーホールにいるマウドゥーディーの息子ハサン・ファールークに電話で弔辞を伝えた［AQEEL||A||809||Z-4; Saulat 1979: 161］。パキスタン国営テレビは9月22日夜9時のニュース番組でマウドゥーディーの他界を報じた［Hasan 1986: 483］。9月23日から数日間は、各紙がマウドゥーディーの追悼特集を組んだ。本コレクションで該当するのはウルドゥー語の日刊紙ジャング紙、ジャサーラト紙である。ジャング紙はパキスタンの建国以前から続く最古参の新聞であり、国内最大手のウルドゥー語日刊紙である。ジャサーラト紙は1970年にカラーチーで創刊された、ジャマーアテ・イスラーミー系列の日刊紙である。アキール博士は、9月23日のジャング紙（AQEEL||A||809||Z-1）、ジャサーラト紙（AQEEL||A||809||Z-4）、9月24日のジャング紙（AQEEL||A||809||Z-2）、ジャサーラト紙（AQEEL||A||809||Z-5）、9月25日のジャング紙（AQEEL||A||809||Z-3）、ジャサーラト紙（AQEEL||A||809||Z-6）だけでなく、葬儀後の同年10月2日からの4日間の特集記事（AQEEL||C||1110||Z-6-[1], AQEEL||A||809||Z-7, AQEEL||A||809||Z-8, AQEEL||A||809||Z-9）、二回忌である1981年9月25日（AQEEL||A||809||Z-10, AQEEL||A||809||Z-10'）、三回忌である1982年9月24日（AQEEL||A||809||Z-11）、四回忌である1983年8月24日から3日間（AQEEL||A||809||Z-12, AQEEL||A||809||Z-13, AQEEL||A||809||Z-14）、七回忌である1986年9月26日（AQEEL||A||809||Z-15）の新聞を継続的に収集されていた。これらは日本では入手の難しい当時の希少な新聞資料であることはもちろん、ジャング紙とジャサーラト紙での報道

2）同行したのは妻と息子アフマド・ファールーク、旅程を手配したロンドンのドーントラベルのヤースィン氏であった［Hasan 1986: 480］。

3）夫婦は6人の息子と、3人の娘を授かった。年長順に、ウマル・ファールーク、アフマド・ファールーク、ムハンマド・ファールーク、フサイン・ファールーク、ハイダル・ファールーク、ハーリド・ファールークの兄弟と、フメラ・ハートゥーン、アースマー・ハートゥーン、アーイシャ・ハートゥーンの姉妹である。マウドゥーディーが亡くなった時、アフマドはアメリカに、ウマルと姉妹はサウディアラビアに、残りの兄弟はラーホールにいた［Saulat 1979: 161］。

4）病床では、側近であったフルスィード・アフマドらと面談し、イラン革命のニュースに共感を示すなどしていた［Saulat 1979: 160–161］。

の違いを知る手がかりとしても重要である。また、著名人から寄せられた追悼文や葬儀の流れなども詳細に記録されており、マウドゥーディーの当時の影響力を明らかにするために欠かせない資料である。

Jang, “Maulānā Maudūdī par ta‘ziyatī taḥrīren.” 1979. Karācī: Roznāmah-yi Jang.（AQEEL||A||809||Z-1, AQEEL||A||809||Z-2, AQEEL||A||809||Z-3）

マウドゥーディーの他界した翌日から3日間、1979年9月23日、9月24日、9月25日のウルドゥー語日刊紙ジャングのスクラップである。23日は一面の上半分、24日は11頁の追悼特集、25日は3頁のナスルッラー・ハーン・アズィーズによる追悼記事が該当する。

23日は、一面の上紙面にマウドゥーディーの顔写真、イスラマーバード空港からアメリカへ飛び立つ前の写真を大きく掲載し、マウドゥーディーの死去がパキスタンだけでなく、イスラーム世界全体の悲劇であると報じている。さらに、遺体が25日にラーホールに到着する見込みであることの記事に併せて、すでに葬儀に参列するための列車の予約が各地で行われているというニュースは、マウドゥーディーが敬愛されていたことを示す資料として興味深い。24日は紙面が11頁に移り、彼の生い立ちや業績を詳細に伝えている。さらに、死去の日を詠んだ二行詩も掲載されている。25日は3頁の紙面の8分の一程度の記事に収められている。ジャマーアテ・イスラーミーの機関紙であるジャサーラト紙と比べると、記事の扱いが格段に早く縮小されていることなども読み取ることができる貴重な情報源である。

Jasārat, “Maulānā Maudūdī par ta‘ziyatī taḥrīren.” 1979–1986. Karācī: Roznāmah-yi Jasārat.（AQEEL||A||809||Z-4, AQEEL||A||809||Z-5, AQEEL||A||809||Z-6, AQEEL||A||809||Z-7, AQEEL||A||809||Z-8, AQEEL||A||809||Z-9, AQEEL||A||809||Z-10, AQEEL||A||809||Z-10’, AQEEL||A||809||Z-11, AQEEL||A||809||Z-12, AQEEL||A||809||Z-13, AQEEL||A||809||Z-14, AQEEL||A||809||Z-15）

マウドゥーディーの死亡直後の3日間と、同年10月3日からの3日間、1981年9月25日、1982年9月24日、1983年8月24日から3日間、1986年9月26日の計13点のウルドゥー語日刊紙ジャサーラトの追悼記事のスクラップである。

9月23日は、一面を黒く塗りつぶした枠で囲った特集号を発行している。マウドゥーディーの顔写真を4枚添え、カラーチー、イスラマーバード、ハイダラーバード、サウディアラビアなど各地で彼の死が悼まれていることを報じた。また文人、宗教家らの弔辞とともに、ズィヤーウルハック大統領が「イスラーム世界における今世紀最大の思想家の喪失」と追悼したことなどを載せている。

この資料で注目すべきは、後の命日前後の記事が収集されている点である。マウドゥーディーの3回忌である1982年9月24日の特集号では、一面でマウドゥーディーの手紙から見る人物像という特集を組んでおり、直筆の手紙も掲載している。また、8頁のマウドゥーディーとハサン・バンナーのイスラーム思想への貢献を比べた記事も興味深い。

このように、葬儀の様子などだけではなく、3回忌、7回忌などまで追って追悼記事が収集されており、マウドゥーディーの他界についてパキスタン国内での反応を長期にわたって残す貴重な資料である。

Jasārat, “Maulānā Maudūdī par ta‘ziyatī taḥrīren 2.” 1979, 1982. Karācī: Roznāmah-yi Jasārat.（AQEEL||C||1110||Z-6-[1], AQEEL||C||1110||Z-6-[2]）

ウルドゥー語日刊紙ジャサーラトのマウドゥーディーに関するスクラップである。（AQEEL||C||1110||Z-6-[1]）は 1979 年 10 月 2 日の記事であり、セクションは異なるものの、（AQEEL||A||809||Z-7）の前日の紙面である。1 頁はマウドゥーディーの葬儀の様子を伝える写真で埋められている。マウドゥーディーの墓前でファーティハを捧げる民衆の他にも、各地から寄せられた弔電や、パンジャーブ大学やバングラデシュで行われた追悼式の様子が 11 枚、キャプションとともに掲載されている。2 頁には、マウドゥーディーとウルドゥー文学に関するハサン・アリー・イマームの署名記事がある。ウルドゥー文学におけるインド・ハイダラーバードの遺産として、オスマニア大学、同大学の百科事典と翻訳所、そしてデカン高原のアウランガーバード出身のマウドゥーディーの名をあげている。

なお、（AQEEL||C||1110||Z-6-[2]）は 1982 年 9 月 24 日のジャサーラト紙であり、（AQEEL||A||809||Z-11）に含まれる [5]-8 頁と同様のものである。

参照文献

篠置理子 2014「ムイーヌッディーン・アキール博士文庫――アブル・アアラー・マウドゥーディー関連書籍に関して」『イスラーム世界研究』7, pp. 162–171.

山根聡 2001「マウドゥーディーのイスラーム復興運動――20 世紀インド・ムスリム知識人の動態的研究」『大阪外国語大学アジア・太平洋論叢』11, pp. 167–208.

Badri, M. B. 2003. “A Tribute to Mawlana Mawdudi from an Autobiographical Point of View,” *The Muslim World* 93(3–4), pp. 487–502.

Hasan, Masudul. 1986. *Sayyid Abul A‘ala Maududi and his Thought*, Vol. 2. Lahore: Islamic Publications.

Saulat, S. 1979. *Maulana Maududi*. Karachi: International Islamic Publishers.